

婦人局一般資料No.16



婦人週間40周年記念作文入選作品集

—女性の能力や役割についての固定的な考え方を見直そう—

昭和63年3月

労働省婦人局

は じ め に

我が国女性が初めて参政権を行使した昭和21年4月10日を記念して、労働省は、昭和24年以来、その日に始まる1週間を「婦人週間」として婦人の地位向上のための特別活動を提唱してきており、本年は第40回を数えます。

昭和50年の「国際婦人年」と、その後の「国連婦人の10年」を経て、現在、21世紀に向けて、真の男女平等を目指す各人の一層の努力が必要とされており、今年の婦人週間は「女性の能力や役割についての固定的な考え方を見直そう」をテーマに、全国的に実施することとしています。

労働省では、婦人週間40周年の記念行事の一つとして、テーマに因んだ作文を、小学生、中学生、高校生等から募集したところ、全国から10,812編の応募があり、厳正な審査の結果、小学校、中学校、高等学校等の各部門毎に労働大臣賞各1編、婦人局長賞各5編、財婦人少年協会会長賞各1編を決定し、これらを「入選作品集」として編集いたしました。

この入選作品集が、婦人の地位向上のための今後の活動に役立つことができれば幸いです。

昭和 63 年 3 月

労働省婦人局長

目 次

はじめに

	ページ
Ⅰ 小学校の部	
○ お母さんがんばって	(岐 阜) 高橋 宏章 1
○ ぼく達と家庭科	(北海道) 笹川 友一 3
○ 道を広げる	(岩 手) 梅原 由華 5
○ お父さん、将来のゆめを見直すよ	(岐 阜) 高橋あゆみ 7
○ お母さんなんでや	(奈 良) 三木 隆博 9
○ 男女の差別	(大 分) 片野 兼作 11
○ どうして女じゃだめなの	(福 岡) 大野みなみ 13
Ⅱ 中学校の部	
○ 女の子だから	(高 知) 中城 春美 17
○ 私の体験を通して	(岩 手) 小笠原 忍 19
○ 未来の男女の職業	(宮 城) 秋山 英恵 21
○ 生徒会役員選挙で学んだこと	(神奈川) 川崎亜希子 23
○ 日本とアメリカの男女差別意識	(香 川) 井原 縁 25
○ 男だから、イスを運ぶのか?	(長 崎) 前田 智成 27
○ 中学生の人間平等論	(兵 庫) 沢柳 敦子 29
Ⅲ 高等学校等の部	
○ 一人の人間として	(岡 山) 丸山 暁 33
○ 人間らしく、母のように	(石 川) 三浦 明子 35
○ 私の理想の女性像	(静 岡) 河本 麻子 37
○ 家事について	(三 重) 岡本 剛 39
○ 女だからといって	(鳥 取) 谷川 映子 41
○ 女は男を変えられるか	(徳 島) 加藤 豊 43
○ 女性の中の女性差別	(広 島) 林 史子 45

添 付 資 料

① 婦人週間40周年記念作文募集要領	49
② 婦人週間40周年記念作文応募状況	51

I 小 学 校 の 部

(労働大臣賞)

お母さんがんばって

岐阜 高橋 宏 章 (男)

(揖斐川町立北方小学校6年)

「あーあ、今日もお母さんおそく帰ってくるのか。又仕事がふえる。いやだな。」

母は、病院に勤めています。その日その日によって早出・おそ出・ふつうというのがあり、早出の時は、七時半から四時半まで、ふつうの時は、八時半から五時半まで、おそ出の時は、九時半から六時半までというふうに、毎日ちがう時刻に出ていき、帰ってきます。だから、おそ出のときには、仕事がふやされるというわけです。

今日も母がおそ出です。ぼくは学校から帰り、すぐに風呂の水入れを始めています。

「こんなことお母さんがやればいいのに。」

次は、夕食の準備です。

「今日はカレーにしよう。」 「はじめはにんじんからだ。」

トン・トン・トン・グサッ。

「イテッ。」 「指を切ってしまった。」

「お母さんならなれているから、お母さんがやれば指なんかきらないのに。」

仕事をやりながらも、（お母さんが早い方ばかりだといいいのにな）と思いこんでしまうほどです。（お母さんも、働くより、家にいた方が楽なのに、どうして働くことにしたのだろう）と思い母に聞いてみました。すると母が、

「一度見に来たら。」と病院へつれていってくれました。

車の中で、（どうせお母さんのことだから仕事場の人と話してばかりいるにちがいない）と思いました。

病院につきました。みんながいそがしそうに動いています。母も、車からおりるなり、すぐに更衣室に入っていきます。すると、一分もたたないうちに、出てきました。

母の仕事場は三階です。母は、

「ここでおとなしくしているのよ。」と行ってつめ所を出ていきました。それから、だいぶ待っていましたが、いっこうにもどってきません。どうしたのだろうと思い見にいくと、母がいそがしそうに働いているのが目につきました。シーツをかえて、そうじをします。時にはねている人と話をしたりもしています。そんな母は、生き生きとしていて、家にいる時とは別人のようです。

お昼になると、母もほっとした顔つきで弁当を食べています。ぼくは母に、

「昼からは、どんな仕事をするの。」と聞くと、
「二階の薬品置場から“てんてき”の薬などを取ってくるんだよ。」
と言いました。それからつけ加えて、
「薬品にもいろいろな種類があるから一文字でもまちがえると命とりになるからとても神経がつかれるんだよ。」

「ふーん。大変なんだね。」
帰ってくると神経がつかれたとっている母でしたが、そんなことで神経をつかれさせて、その後で又、家のことで神経をつかうと、いくらじょうぶな母でも体がもたないのではないかと、心配になってきました。

帰ると中、母の生き生きとした顔が目にかんできました。母にとって、仕事とは生きがいなんだなと思いました。すこしでも続けてもらいたいです。それには、ぼくもがんばらなければいけません。

家に帰ってぼくは、仕事について考えました。（母がおそいからといって母ばかりに仕事をまかせてはいけない。母も、ぼくたちのために働いてくれているのだから、ぼくも、母が少しでも楽になるように、たくさん仕事をしなければいけないんだ）そう思いこみました。

次の日、団らんの時に、ぼくから思いきって、家族で仕事を分担することを提案しました。すると、

「うん。お母さんを少しでも楽にさせてあげるのもいいな。」
と、父も姉もさん成してくれました。ぼくは、おふろの水入れ・げんかんそうじ・べん所そうじになりました。けれども、いやな気持ちは、少しもしませんでした。

父が、
「みんな三日ぼうずにならないようにがんばりなさいよ。」といいました。すると姉が、
「父さんこそならないように。」と言いました。そこでぼくも加わり、
「自分こそ。」と大わらいしました。その時、母の顔をふと見ると、一しずくのなみだがひざの上に落ちるのを見ました。ぼくは、これでよかったんだ。「お母さんもこれまで通りがんばって。」と心の中で母の顔を見ながら言いました。

今では仕事を分担し、協力しあう家族になりました。ぼくも自分の生きがいを見つけて、将来の職業を、母のようにがんばりたいです。



(労働省婦人局長賞)

ぼく達と家庭科

北海道 笹川友一(男)

(中富良野町宇文小学校5年)

ぼく達は、五年生になってから、一週間に二時間、家庭科を勉強しています。そして、たまあにだけど、調理実習をします。その時は、みんな、いっしょうけんめい、楽しみながらします。

十月二十八日に、「トーフ作り」をしました。みんなは、その時も楽しそうに作りました。前の日に、うるかしておいた大豆をミキサーに入れていただきました。それを煮てから、少しさまして、友達がにがりを流したら、白い液が、すうっと、とう明になってかたまりだしました。水をこぼしたり、ミキサーのふたをするのをわすれて、スイッチを入れたので、おからがとび出したりしたこともありましたが、みんなで、楽しく仕事をしました。

そして、トーフが完成しました。

でき上がった時は、みんな、

「ワーイ。ワーイ。」と、喜びました。そして、みんなで、つまみ食いをしました。できたのトーフは、とてもおいしかったです。

次の日の、十月二十九日には、できた「トーフ」と「おから」を使って、調理実習をしました。作ったものは、「マーボードーフ」と、「みそ汁」と「おから」でした。グループに分かれて、作りました。ごはんも、たくことになりました。

男子も女子も、仲良く、いっしょうけんめいに作りました。お湯をわかしたり、材料をあらったりしました。調理実習が、あまり得意でなかった男子も、トーフや、あげを切ったり、ガスを使ったりしました。みんなが、真けんに仕事をしました。協力しあったので、どれも、立派にできました。

そのあと、

「おいしい。おいしい。」と、いいながら、みんなで、ごちそうを食べました。

ぼく達の先生は、毎朝みんなに、

「きのう、家でした仕事はなあに？」と、聞きます。みんなは、一人ずつ、してきた仕事を発表します。このごろは、男子も、「茶わんあらい」、「茶の間のそうじ」、「ごはんした

く」などの、流しの仕事もしてくるようになりました。

むかしは、女子だけが流しの仕事をして、男子は、外でしか働かなかったそうです。でも、今はちがいます。男子も女子も、流しで仕事をして、女子も、外へ働きに行くことが多くなりました。ぼくのうちの、お母さんも農家の仕事がない時は、よそに働きに行っています。

ぼくは、小学校の家庭科が一番いいと思います。なぜなら、小学校の家庭科は、調理やふくろづくりを、男子も女子もやっています。

中学校へ行くと、女子だけが家庭科をして、男子は、技術しかないという学校もあるそうです。

ぼくは、小学校では、両方できるのに、中学校では、なぜ分かれて勉強するのか不思議でたまりません。せっかく、小学校で楽しくやってきたのに、中学校では、どうして分かれてしまうのでしょうか。

男子も、調理をしたいかも知れません。

女子も、技術をしたいかも知れません。

だから、男子も女子も、いっしょに同じことを勉強すればいいと思います。大人になった時、家庭科で勉強したことが、きっと役にたつと思います。だから、ぼくは、家でもすすんで流しの仕事をするようにしています。

ぼくは、男子も女子も平等になればよいと思います。ぼくの行く中学校が、そんな学校だったらよいなあと思います。



(労働省婦人局長賞)

道を広げる

岩手 梅原由華(女)

(江刺市立大田代小学校6年)

「ごちそうさま。」

はしを置いたみんなの顔は、満足気でニコニコ顔。今日も家族五人そろっての夕食が終わった。横では、弟がおなかをかかえて苦しそうにしている。

さあ、これからが私の仕事だ。めいめいが重ねた食器の山をかかえて、スーッとこたつから出て台所に行く。祖母と母と私とで、いろいろな話をしながら茶わん洗いをするのだ。

洗うのに時間がかかる時があるけれど、前みたいに頭に来ることがなくなった。それは、この家事分担を進んでやっているからだ。

去年までは、こういう気持ちではなかった。

「由華。ちょっと出かけてくるから、洗たく物入れてけろ。」

と、言われても、すぐには「ハイ」とは言わないで、

「ええっ、何で私がやんなきゃいけないのよ。」

と、口答えをしてから、しぶしぶとやっていたのだ。近くには、弟もどろどろしているのに、どうして私にだけしか言いつけないんだろうと思ってもいたからだ。

食事の後かたづけも、祖母や母がやってあたり前だと思っていた。だから、疲れた顔の二人に、「由華。茶わん洗いしてけろや。」とたのまれても、ムスッとしてやってあげるという顔でいばって仕事をしていた。

そんな私が変わるきっかけは、何だったのだろう。今、考えるといくつか思いあたることがある。

六年生になってから、家庭科の勉強で、家族の生活の時間を調べたことがある。その時、祖母と母の所が、家事分担の印の赤い色でうまることに気づいた。祖母は、田や畑仕事。母は、機械の部品工場のパートタイマー。父は、建築会社に勤務。私と四年生の弟は、学校。昼間の時間は、同じようにふさがっているのに、その他に朝早くから夜おそくまで、家事分担が二人に加わる。これでいいのか。その一週間分の生活表を見ながら考えた。

家族の一員だからやるのだ。手伝うのではなく、分担して責任を持ってやるのだという

考えになったのは、この日からだ。弟も、風呂たきをうけもった。

父は、母や祖母がいない時、料理を作ってくれる。おいしいと評判がいいのだが、祖母に言わせると、昔は決して男は台所になんか入らなかったものだそうだ。

「お父さんが台所に立つようになったのは、なんで。」と父に聞くと、

「男が台所に立ってもおがしぐねえ時代になったからだ。」

とハッキリと答えてくれた。とすると、昔は、男の人にも、「男だから」というだけで、してはいけないこともあったんだと思った。

「今は、くらし方が変わって、家に現金を少しでも入れたいから、お母さんも働きに出てるんだよ。」と祖母が言うと、私達の話を聞いていた母が、

「そういう理由もあるけれど、外に出て働いていると、自分の気持ちも若くなるし、自分で働いて作ったお金を使う時も、気分がいいからな。」と、真剣な顔で言った。

祖母の若いころには、外へ出てお金をかせぐのは男、家事をするのは女と、知らないうちに信じていたから、(何か買いたい。)(何かしたい。)と、考えても、なかなか実行に移すことは困難だった。いつの間にかそういうもんなんだと、あきらめたりがまんしてきたようだ。

だから家のためだけではないという、この母の仕事への言葉は、とても新鮮に胸にひびいた。

昔は男の人だけだった部落の話し合いにも、夫婦そろってとか、母達だけとかあって、留守番するのはさびしい時もあるけれど、そんな時には、母も父も、張り切っているように見える。

テレビでもよく、「女性で初めての……。」と新しい職業についた人達の事を伝えている。私はこういうことが当然だと思っくらしている。しかし、社会科で学んだように、こうなるまでの女の人の歴史はなかなか大変だった。それは我が家の祖母や母のくらし方の変わり方を見てもわかる。

みんなが少しずつ広げて来た道、それが、男女同権なのだ。今、私の未来は、男女の別だけでは決まらない。可能性が広がっている。

その道をせまくするのも、自分達の考え方にあると思う。女だからといって、あきらめたりにげたり、なまけたりすれば、せっかくの道はくずれていく。家族の中でも友達どうしの中でも、人間なのだからという考えで、役割を果しながら道を広げて行きたい。

(労働省婦人局長賞)

お父さん 将来のゆめを見直すよ

岐 阜 高 橋 あゆみ (女)

(揖斐川町立北方小学校6年)

「おーい／今日のごはんは何かいい。」

「お父さん／いいよ、お父さんが作らなくっても。私が作るから／」

これは最近あった父と母との会話です。私のお父さんは、何かといえば、すぐ洗たくする、ごはん作る……と、男のくせに女の仕事をやり始めるのです。そんなお父さんを私は時々、（へんなお父さん）と思う時があります。普通のお父さんなら、こんなふうに、女の仕事をやりたいなんて、絶対に言わないと思います。だれかにたのまれてもやりたくないという方でしょう。それに比べて私のお父さんは……となさげなくなる時があります。

今日もお父さんは、いつものように、

「ようし／おいしいものを作るぞ／ 今日は何がいいかな……。」

と、はりきっています。“母の日”なら、こういうふうに、いつものお礼に代わりに食事を作るのもいいけれど……私の家はまるで、一週間のうち、三日くらい母の日のようです。その上私にまで、

「おうい／大根おろして／ 今、手があいとらんのや／」

とたのむのですからたまったものではありません。いやいややっていると、

「料理は、心をこめて作らんと、おいしくないぞ。」

とまるで私の心を見ぬいたかのような口ぶりで文句を言うのです。（たまには、家へ帰って来たら、ビールでも飲んで、何もやらずにいればいいのに……）と毎回思います。

友達とお父さんの話をしていると、

「家に帰ったら、灰皿持ってこいとか、いばる時あるよ。」

と、言っているのをよく聞きます。そんな中に入り話をするのがはずかしくて、一人取り残されたような悲しい気持ちになってしまいます。そんな時私は、そっとみんなからはなれて、ぼつんと一人すわっているのです。

私はそんな毎日がいやでたまらなくて、思い切って、どうしてこんなにまで料理が好きなのか、いつか聞こう、いつか聞こうと思って、お父さんの気げんのいい時を見はからっ

ていました。

「ねえ、お父さん、お父さんはどうしてそんなに料理をやりたがるの？男なんだから、男の仕事だけをやればいいじゃない。どうして。」

と、いかにも不思議そうに、聞きました。すると、

「それはな、お母さん、毎日仕事で大変やろ。お父さんも働いとるけど、やっぱり何か手伝ってやりたいって気持ちになって……。それにな、料理ってのは、やっているうちに、だんだん料理する者の、お母さんの気持ちも、分かってくるっていう、もんなんや。」

私は、返す言葉さえありませんでした。お父さんが、こんなにもお母さんの事を考え、やさしくしたいという心があると言うのに……。私はそんなお父さんを今まで、非難していたのです。

しかし、お母さんはお父さんの事をどんなふう to 思っているのだろう……と思いさっそく聞いてみました。すると、

「お父さんがいると、とっても助かるよ。あゆちゃんが小さいころも、お母さんがいそがしいとよく、おしめをとりかえたりして手伝ってくれたりしたもんだよ。それに、お父さんがよく食事を作ったりするのは、料理が好きだから。お父さんはとってもいいお父さんだよ。」お母さんはやはり、お父さんの事をよく理解しているんだと思い、そんなお母さんの考えとまったく反対の考えだった自分がなさけなくなり、又自分をにくくもなりました。今日ほど、自分のあやまった考えをなさけなく、又、にくくも思った事はありません。

その日の夜も、台所にお父さんがお母さんといっしょに、夕ごはんを作っていました。私はそんなお父さんのがっちりとした背中に向かって、何度も何度も（お父さんごめんなさい）とくり返し、くり返しつぶやきました。

その次の日からは、お父さんの料理する姿が何だかとても、輝やかしく見えました。友達と話していても、お父さんの事を話したくなりました。その日の夜、ふとんの中で私は、（お母さんはお父さんという、すばらしいパートナーを見つけたなぁ、私は将来婦人警官になりたいけれど、結婚して、子供が産まれても、安心してその職業につけていけるように、私のために何かやってくれるような、お父さんみたいな人と結婚できたら幸せだなぁ）そんな事を心の中で思いました。

私は今まで仕事を男の仕事・女の仕事と、区別して考えていました。私は今一度、婦人警官以外にもっと私の力で社会のために働く仕事がないか見直したいと思います。

(労働省婦人局長賞)

お母さんなんでや

奈 良 三木 たかひろ (男)

(大和高田市立磐園小学校3年)

「夕ごはんやで。」

お母さんのよぶ声でぼくと妹は、台所に行きます。今日のおかずは魚です。

テーブルの上にならんでいる魚を見るといつものようにぼくの所には頭の方が、妹の方にはしっぽの方をおいてあります。

(なんでぼくの方がいつも頭の方やろ)

とあって、お母さんに、

「お母さん、どうしてぼくにはいつも頭の方ばかり食べさせるんや。」

と聞きました。

すると、お母さんは、

「それはな、頭の方がえいようがあるからやで、たかひろは男の子やから、大きく強くなってもらわんとなあ。」

と答えてくれました。ぼくは、

「ふうん。」

と言いましたが、心の中で

(そうかなあ、男の子も女の子も大きくなるんやからいっしょとちがうかなあ。頭の方がえいようがあるんやったら妹にも食べさせたらええんとちがうかな)

と思いました。

妹を見ると、しっぽの方でも何ともないのか、何も言わずに食べています。

ぼくはやっぱりおかしいと思いながら、魚の頭をはしでつつきました。

そういえば、服がズボンから出ていたりすると、

「男の子やからもっとちゃんとしなさい。」

妹とけんかをする時、

「お兄ちゃんは男の子やから妹をなかさんとき。」

と、いつも男の子だから・・・とよく言われます。

「お母さん、男でも女でもお母さんから生まれたんやからいっしょやで、何でもいっしょにせんとあかんのとちがうか。」

今度、魚が出たらぼくは、そう言おうと思っています。



(労働省婦人局長賞)

男 女 の 差 別

大 分 片 野 兼 作 (男)

(杵築市立八坂小学校6年)

ぼくは、今、男子8人、女子11人、計19人のクラスにいる。その中で力をもっているのはどっちだ？ と聞かれても返答が出来ない。

昔は男と女の差別は、はげしかったそうだ。女の人には男の人のいいなりになることがあたりまえや、美德とされていた。

なぜ男と女ということで差別をしていたのだろうか。生まれた時からきまっていることで男と女を途中でかえることができないことなのになぜ差別をする必要があるのだろうか。大切なのはその人の努力や、やる気、力なのに、・・・ とぼくは思う。

よく聞くことばに

「女のくせに、男にさからうな。」

「男なら、女にはぜったい負けるな。」

これだけのことばに、どれだけの意味があるのだろうか。女の人が、男に少しぐらいさからってもいいじゃないか。それなりのわけがあるのなら、とぼくは思う。また、男が女に負けたらと思う人が居るが、女の人の方がすぐれていることはいくらでもある。だから女が男にさからおうが、男が女に負けようが、関係ないと思う。そのようなことから男と女の間に見えない段ができるのだと思う。これらのことは男女平等の今でも変わりはないと思う。

ぼくの家でも、お父さんの権力が強い。なんだかんだ言っても最終的にはお父さんの意志が尊重される。昔からそんなをしているのは女の人だ。それはお母さんをみていてわかるような気がする。

家族をこままわしのこまにたとえると、おとうさんが軸でぼくたちはまわりでまわっている空気みたいだ、とよく思う。

テレビでもよくあるが女の人が強い家庭などを見るとなぜか、自分が男としてなさけないようなそんな気がしてくる。それは女の人に男がおさえられているからではなく、男の人の気が小さくて、こそこそとしているからかもしれないけど、ひょっとしたらぼくの心

の中に男として女のいいなりになりたくない、と思う気持ちがあるかもしれない。いや、あるのだろう。

女の人はどうなのか。いつも男のいいなりになっている女の人をみたらやはりはらだたしきをおぼえるのだろうか。女としてなさけなくなるのだろうか。もしそうだったらと思うと、男女のちがいが強かった時代は、むじゅんを感じて生きた人も多かったのだろうと、そんなことも思う。

今の世の中は男女平等となっているが、しかしまだまだ、男と女の差別は小さなことながら続きつつある。人間だれの心の中にも、男と女は平等だという気持ちはあるけど、それと反対に、女のくせに、男なら、などという考えもあると思う。そんなものの考え方をみると人間はだれでもわがままなような気がする。

ぼくは男なので女の人々の心はよくわからないけど、男と女どちらがえらいということはなく、どちらが家庭の中心になればいいともいえない。だから、自分の心から、女のくせに、などという考えをなくさないかぎり、このような立場は変わらないと思う。

男女の差別は、型のうえではなくなっているが、人間の心の中からはなくすのはとてもむずかしいと思う。ただ言えるのは、おたがいを思いやろうとする気持ちが大事ではないかと思う。二十一世紀は、みんなすばらしい考えで、社会生活を送るようになればいいと思う。

男と女のすぐれた面を見合えば、どちらが力をもっているか、どちらがえらいかなどの考えはおこらないと思う。そして心の中まで差別はおこらないだろうと思う。

どうして女じゃだめなの

福 岡 大 野 みなみ (女)

(大刀洗町立本郷小学校1年)

わたしは、人から「きょうだいは何人ですか。」といわれるのが一ばんきらいです。わたしのうちは、わたしといもうと二人の三人しまいです。「へえー、女ばかり三人」とか「おにいちゃんとかおとうとはほしくないの」とかよくいわれます。「おうちの人もがっかりしてるでしょう。」とかもいいます。わたしが「ううん、おとうさんもおかあさんもなにもいわないよ。」といってもへんな目でみます。おとうさんのところにくるおきゃくさんもおなじようなことをよくいいます。そんなとき、おとうさんのかおをチラッとみます。おとうさんのこたえはいつもおなじです。「いちども男がいいとか女がいいとかおもっていませんよ。」おきゃくさんは「へえー」とおどろいたかおをします。わたしたちがいるからかなとおもっていたら「おとうさんはね、いつでも、どこでもあなたたちむすめのことをじまんされているのよ。」とかあさんがいいました。でも、くるめのおじいちゃんはおとうさんとちがって、いもうとたちがつぎつぎにうまれると「またか。」といってがっかりしていました。そして「おれのあとつぎがない。」といったそうです。おじいちゃんはおかあさんのおとうさんで、おおさかにおじちゃんもまごもいるのでそんなことをいうのはおかしいとおもいます。すると「おとうさんとおじいちゃんがおなじおしごとをしているので、そのあとをついでほしかったのよ。」とおばあちゃんがおしえてくれました。そんなおじいちゃんもおばあちゃんのまえではグチをいっても、わたしやいもうとのまえではけっしてそんなことはいいません。はんたいに「これからは、女もしっかりべんきょうをしてせかいにつうようするようであればね。」といいます。もしかしたら、おとうさんもおじいちゃんとおなじようにこころの中ではさびしいのかなと、ときどきおもったりもします。

(どうして女ばかりきょうだいじゃだめなのかな。)

(どうして女は、あとつぎになれないのかな。)

わたしは、ようちえんにいくまえまでは、「どうして女の子は、ズボンをはいてはいけないの。どうして立ちションをしてはいけないの。」とまじめなかおできく子だったそうです。ようちえんや学校にいくようになってから「女のくせに」とか「女だから」とかいう

ことばをよくききます。クラスの男の子なんか、わたしがなにかするたびに「おまえは女だろう。」といいます。

（女だったらなにもできないのかな。）

（女だったらすもうもサッカーもできないのかな。）

（人げんは、みんないっしょなのにどうして女だけさべつするのかな。）

おとうさんがいいました。「女だからといってなにもできないことはないんだよ。マラソンのように女の人がずいぶんがんばっているスポーツなどたくさんあるよ。あのがんばりにはおとうさんもまけるよ。」

まえにすんでいたうちでは、おかあさんもはたらいているともだちがおおくて、おみせでおかしなどをかいにいくのをみて、とってもうらやましくて「おかあさんもうちなんかなくて、はたらきにいけばいいのに。」といつもいっていました。おかあさんはオムツをほしながらいっていました。このことをしたおとうさんは「おかあさんはね、じぶんのおしごとをやめておまえたちやおとうさんのためにおうちにいるのだよ。うちのしごともそとのしごととおなじようにたいへんなのだよ。もったりかいしようね。」といました。

わたしは、そんなおとうさんが大すきです。おりょうりもじょうずです。わたしは、大学へ行って先生になるためのべんきょうをしたいです。そしてけっこんしてもはたらきます。おとうさんみたいな男の人だったらいいなとおもいます。そして女のくせに女だからといわなくなるようなしゃかいになったらすばらしいなとおもいます。



Ⅱ 中 学 校 の 部

(労働大臣賞)

女の子だから

高 知 中 城 春 美 (女)

(大野見村立大野見中学校3年)

私が父から注意される時、よく言われる言葉に、

「女の子だから、きちんとしなくてはいけない。」

というのがある。この、きちんと、というのは、言いかえれば、家事のことである。

私の家は、四年前に母が亡くなったので、男三人、女の私一人の四人家族である。だから、家事全般は、私の仕事となっている。洗濯、炊事、掃除、全てが私にまわってくる。

家事をしながら、よく思うことなのだが、どうして私が、女だという理由だけで、家事を全てひき受けなければならないのか。皿洗いや、洗濯なんかは、やろうと思えば男にだってできるはずだ。男で自炊している人だっているんだから。私が、

「手伝って。」と言っても知らんぷり。

「どうして私が、全部しなきゃいけないの。」そう言えばかえてくる言葉は一つ、

「女の子だから。」いつもこの一言で片付けられてしまう。くやしくて言い返せば、

「女の子は、家事をするのが当たり前。」と言われる。私だってしたいことはたくさんあるのに冗談じゃない。

夕食前、男三人はTVを見たり、自分の娯楽のために、時間を使っている。私は食事の準備をしなければならない。私が苦労して作った食事でも、「ありがとう。」という、たった一言の感謝の気持ちすらない上に、やれ、みそ汁が薄いだの、じゃがいもが固いなどと文句を言われることだってある。本当に女は損だと思う。

このように、男は外で仕事、女は家事と決めつけている家庭が多いはずだ。しかし、最近では、共働きの家庭も増えてきている。このように決めつけてしまっていては、女の人には、働いて帰ってきたその上に家事もしなくてははいけない。男女平等と言われているけれど、これではあまりに不公平ではないか。

同じ人間なのだから、女にできることが、男にできないはずがない。それをどうしてやらないのか。私には、男だということをいいことにして、家事から逃げているのかとさえ思われる。

働いて帰ってきて、家事をするのは、大変なことだろう。だから、私は男の人に、もう少し女の人のことを考えてほしい。家事がどれだけ苦勞する仕事かをわかってほしい。男の人にも一度、一人で家事全てをやってみたらいいと思う。そうすれば、家事の苦勞、女の人の苦勞を、身をもって知ることができるだろう。

男尊女卑という言葉からして私は気に入らない。男は尊く、女は卑しい。いったい男のどこが尊くて、女のどこが卑しいのか。女の方は、子供を生むことができるし、家の中を守ってやっているのも女がほとんどだ。男の方は、外で働いてお金を持って来るから、偉いみたいになっているけれど、家事をやってくれる、女の方がいなければ、健康な体で働けはしない。健康な体で働けるのは、女の方のおかげだといっても、おかしくはないのだ。その女の方に向かって、卑しいなどとは、昔の方はいったい何を考えていたのだろう。女の方も悔しくはなかったのだろうか。『伊豆の踊子』の中に、水を飲むときに、「女のあとはきたない。」というような言葉があったのが印象に残っている。そんなことを言われても何も言わないところに、昔の女の方の立場が見えてくる。昔の女の方達は、疑問も持たなかったのだろうか。「女に学問はいらない。」といったのは、眞実を知られるのを恐れたからではないか。とかんぐってしまう。

私は、家庭や家族というものは、助け合いで成り立たなくてはいけないのではないかと思う。だれかが苦勞していたら、苦勞を分け合わなくてはいけないのではないだろうか。ありきたりの言葉だけれど、やはり、それが一番大切なことなのではないか。

私は、結婚するのならば、私一人に家事をおしつけたりするのではなく、お互いに尊重し合っていける人がいい。いや、そういう人でなければ、結婚したくはない。例えば、私が仕事を持っていて、帰りが遅くなれば、夕飯を作っていてくれる。私が食事を作っている間に、お風呂をわかしたり、そうじをしてくれる。そんな人と結婚したい。夢を見てると言われるかも知れないけれど。

つまり、私に言わせれば、これが当り前のことになった時こそ、本当に、男女平等になれるのだ。



(労働省婦人局長賞)

私の体験を通して

岩手 小笠原 忍(女)

(二戸市立上斗米中学校2年)

「おなごだもの、あだりめえだべ。」

教室にいた一男子から発せられたこの一言は、私にとって非常に腹立たしいものであった。

それはある日の給食時間、当番をサボっていた男子に注意した時の事だった。給食の準備を女子だけにやらせて、男子達は話に熱中しており、それを注意した際、返って来た言葉であった。

そればかりではなく、掃除の時だってそうだ。女子だけにやらせ、男子達は適当にやったまねをしてごまかす、という感じである。注意すれば、また例の、

「おなごだもの、あだりめえだべ。」という言葉が返って来るだけである。

このように、毎日の生活の中にみられる、男子の女子に対する差別的な考えが、私達の地域にはいぜんとして残っている。もちろん、男子が男子、皆そうであるというわけではないが、しかし、何人かは食事の準備・片づけ、掃除など家事的なものは、女子がやるのは当たり前、と考えているのは確かである。

歴史をふり返ってみても、古来日本では、“男尊女卑”の風潮が長期に渡り続いて来た。そして、二十一世紀を目前に控えた今日でも、それが今だにあちらこちらに、その痕跡をぬぐいきれないでいる。

また、現在では“普通選挙法”にのっとり、昭和二十一年より、二十歳以上の全ての男女に選挙権が与えられている。が、この“選挙権”一つとってみても、女性は長い間政治に参加することが出来なかったことが分かる。さらに、

「女・子供に何が分かるノ」

「女・子供は引っ込んでいろノ」 などという言葉の時として耳にすることがある。何という、女性を侮辱した言葉ではないだろうか。

このような日本の“男尊女卑”の傾向とは逆に、アメリカなどの諸外国では“レディーファースト”が常識であり、一個の独立した人間として、女性を大切にしている。また、家事・育児なども夫と二人で分担したり協力して共に行うことも、向こうでは当たり前の

ようである。

さて話は変わるが、私はこの間行われた生徒会役員選挙で、生徒会長に当選した。立候補した理由はいろいろあったが、その中の一つに“女だって男と同じに出来るのだ、ということ”を皆に分かってもらうため”というのがあった。私が立候補することを知った執行部の男子の先輩は、

「会長になれば、男子の反発を受け、お前がづらい思いをするだろうから……。」

と、引きのめようとした。もちろんこれは、私の事を心配してくれての言葉であった。

しかし、そう言われればなおさら私の決意は一層強く大きくなるばかりで、結局選挙に立ち、不信任何名かはあったが、無事会長に就任することになった。先輩の言う通り、多少の反発を受けることは最初から充分覚悟していた。

いざ会長になってみると、初めのころはやはり覚悟していた通り、言葉には出さなくとも“女のくせに”という雰囲気をつくりだしていろいろな場面で肌を感じた。しかし、そんな事をものとはせず仕事を進めてきたら、

「頑張れよノ」と、声をかけてくれる先輩もいて、とても心強く励まされた。これからは、少しばかりの事には気をとらわれないで、ただ、ひたすら自分の責任を果たし、仕事を精一杯やっていくつもりである。そのうえで、女子の生徒会長はどうなのか、みてもらいたいと思っている。

現在の日本では、一般的に男性の女性への考え方が固定的なようである。女性の能力・役割についての考え方が、あまりにも観念的すぎるのではないだろうか。

今日、女性も男性に交って、様々な面で活躍している。だから男性は、一個の人間として、女性自身を認めてほしいと思う。また、女性自身も、自分への甘え、つまり“女”という事への甘えた考えを捨てなければならないと思う。普段の生活の中で、“女だからおおめに見て”とか“女だから出来ない”などという事がよくある。“女”という事を一種の武器にしてはいないだろうか。もちろん、男性にしか出来ないこと、女性にしか出来ない事もあり、それはお互いに助け合わなければならないと思う。けれども、充分力はあるながら、それを自分で発揮せず甘えることは、とても残念な事だと思う。

これからは、女性もいろいろな面で積極的になるべきだと思う。

「おなごだもの、あだりめえだべ。」

という、差別的な言葉を、二度と言わせないためにも――。

未来の男女の職業

宮 城 秋 山 英 恵 (女)

(登米町立登米中学校1年)

私は中学校に入って、週時程表がわたされた時、技・家と同じ時間に二つの科目が書いてあるのに気付きました。なぜ同じ時間に二つの科目が書いてあるのかわからなかったの
で、友達に聞いてみたら、

「男子が技術をして、女子は家庭科をするんじゃないかな」

と言われました。私はその場で納得したものの、後からよく考えてみるとなぜ男子は技術
で、女子は家庭と分かれているのか、やはり疑問に思うのです。小学校の時までは男子も
女子も家庭科をしました。だから余計、そんなふうに思うのかも知れません。

それでもやはり、この中学校でも男子で家庭科というか、料理をしたいという人がいた
のです。それは調理クラブに入った三年生の人達でした。入った人の人数はそれほど多く
もなく、五人入ったか、入らないかぐらいでしたが、その少ない人数でも人目を気にせ
ず、自分の意志で決めたのです。

文化祭の時もエプロン姿でボーイさんをしていました。文化祭に来た祖母は、

「なんか男の人、エプロン着てボーイさんやってたみたいだね」

とびっくりしたように言いました。私もびっくりするけど、祖母にとっては夢にも思わな
かったことだったでしょう、でもそれはしょうがないことなのです。

祖母は大正元年の生まれで女は家庭、男は仕事とそういう時代の人なのです。

「おばあちゃんが若い頃は、いつもひかえめにして、礼儀作法もよくなくちゃ、嫁のもら
いてがなかったんだよ」

そう言って祖母は私が小さい頃からわりと礼儀作法にはきびしくしていました。そうや
って私が女らしい人になることを楽しみにしている祖母には悪いけど、私はそういう人
にはなりません。だって私は世界を飛び回るレポーターになるんですもの。色々なことに挑
戦して、色々なことに興味を持つ、そのための行動力と好奇心を大人になってから持つ
のではなく、子供のうちから養うべきだと思うからです。

昔の女の方は、ひかえめにして、家のことばかりやらなくてはいけなかったと思うけれ

ど、現在の女の人はそうしなくともいいのです。だから女性の宇宙飛行士や探険隊がいて、時代のスピードについていっているのです。

その点、父のひいおばあさん=私のひいひいおばあさんは慶応生れでしたが、きちんと時代の流れについて行った女^{ひと}だったそうです。子供の頃から文学にはげみ、仙台の家庭教師をつけて主に漢文を勉強したそうです。その結果、その学問の実力が認められ、十四・五・六で登米で一番最初の女先生に依職されたそうです。そのため、町の人々に尊敬され、年をとっても、孫たちに好かれて八十七歳で亡くなったそうです。

「ほら、この人がそうだよ」

白黒の、ちょっとほこりっぽい写真には、たくさんの人にかこまれた白髪のおばあさんが真ん中にちょこんと座っていました。本当に知的で、りこうで、満足そうなその顔は、何か私にいいたいことがあるように、私をじっと見つめていました。それが何か私はひいひいおばあさんの目でわかりました。

「英恵だって努力すればレポーターにだってなれんだよ。そして、一生懸命になって、各国の事実を伝えるんだよ」

と、優しくはげましてくれたのです。こんなこと、本当にありえないことだと思うかも知れないけれど、心臓がドキドキして、胸がいっぱいになったのです。私の先祖にこんなにりっぱな人がいたなんて、とても幸せな気分になりました。

この世の中には、数えきれないほどたくさん仕事があります。その数えきれないほどの仕事を、これは男の仕事とか、これは女の仕事とか言っていないで、何年かしたら、女の大工さんが出て来たり、女のジャンボ飛行機のパイロットがいたり、今度は逆に、男の家政夫さんや、看護夫さんが出て来たりしてもおかしくない、そんな時代になったら、きっと現在よりも楽しいことが起きるんじゃないかなと思う。今日この頃の私です。



(労働省婦人局長賞)

生徒会役員選挙で学んだこと

神奈川 川 崎 亜希子 (女)

(横浜市立霧が丘中学校2年)

私は現在、中学校の生徒会長という大職に就いています。この「会長」になるまでのほんの二週間あまりの間で私は「女性」としてこの先どのようにしてゆけばよいのかということを経験する身で学ばされました。それは大人達から見ればほんのささいなことかもしれませんが、しかし私には、短い時間で沢山のことを学びすぎたのではないかなと思うほどでした。

秋がもうそろそろ終わり、冬に入り始めると同時に生徒会本部役員の任期もきれ、三年から二年へとバトンがうけ渡されます。それまで私は一年間、生徒会で書記として努めてきました。そこで私は、その書記として努めてきたことを生かし、一つ大きな賭けを試みるつもりで、I君が立候補しているのにもかかわらず会長に立候補しました。それは今までの生徒会役員選挙で何人もの女子が男子と同じ条件で会長に立候補し、破れさって来ました。何も知らない無知な男子と経験を積み重ねてきた女子—こんな状況でみんなはどちらを選ぶでしょうか。I君と私との差。それでもみんなは男子と女子ということで区別してしまうのでしょうか。私はそんな好奇心を少し抱きながら立候補したのです。しかしそれから選挙が終わるまで、毎日が大変でした。女子だからと先生や生徒に批判される毎日。私もそれは覚悟していた上でした。

そんな中でも、Y先生に職員室へ呼ばれたことは、とてもショックをうけました。先生は「I君が立候補するのは知ってるね。あなたのことだから大丈夫だとは思うけど、一応I君は男子でしょう。女子のあなたにとっては、そのことで少し票が集めにくくなるかもしれないわね……。」と。

そのこととは私が女子であるということです。こんな事、いつものことで何も気にすることはないのかもしれませんが、そう忠告をおっしゃったのが男でなく女先生だったので。Y先生は自分も女性でありながら、その女性の権利を男性よりも劣っていると認めているのです。先生の心配される気持ちがそのとき私には、そう思えたのでした。

私は二人姉妹での家庭で、自由、きままに育ってきました。両親も特に「女らしく」私

達を育ててきませんでした。今までそんな環境で育ち、そして今回の生徒会役員選挙でいきなり女性としての意識をしなければならなかった私が母に、

「立候補、辞退しようかな。」

などという弱音をはいた時は母もさすがに哀れに思ったのでしょう。いつも何かと学校のことを話せと言う母がそれからしばらくの間、何も聞こうとしませんでした。

いつごろからだったのでしょうか、こんなにも「女性」としてのワクをはめこみ、その中で平気な顔をしていられるようになってしまったのは。そういえば、中学校に入学してから徐々に男子からワクをはめられても我慢できるようになりました。そうして男子は自由に力を伸ばしてゆくのです。決して女子は我慢できるようになったのではないのです。周りのすべての環境が私達「女性」をおしこめるのです。

「中学生なんだから、もう少し大人になれ。」こんな言葉にそそのかされて……。大人達はこんな私達を「成長した」と言って喜びます。しかし私達は、ワクの中へおしまれると同時に感情というものを失います。だからワクをはめられて「いやだ。」ということも言えなくなるのです。

男女差別がほとんどないとされている世間でも結局は少々男性上位とされていると生徒会役員選挙を通してわかるようになりました。

生徒会役員選挙でもう一つわかったことは女性だっていくらでも自分を発揮できるということです。これは現代社会への女性の進出にもたとえられることだと思います。また、その進出にあたってまず自分が「女性だから……。」という考えを捨てることが大切だと思います。これはすべてのことではなくて、「女性」から出る弱み、甘えをなくしてゆくために必要なことだと思います。今は男性上位の時代でも、女性のそんな新しい考え方で、いつかは男性と本当に対等に張り合える時代がくるのも可能になってくるのではないかと思います。

現に今、日本でも次々と女性の社会への進出が目立ち始めています。私も、できればこの生徒会役員選挙をきっかけとして、その中の一員になることを望み、そして多くの女性がこの先、次々と活躍してゆく姿があってほしいと思います。

私は、生徒会役員選挙でこのようなことを学べられたのを幸運に思います。

(労働省婦人局長賞)

日本とアメリカの男女差別意識

香 川 井 原 緑 (女)

(香川大学教育学部附属

高松中学校1年)

小学校の六年生の時、私は、ある男子にこう言われたことがある。

「お前は女なんだから、だまって書いとけばいいの。」

それは、学級会の司会をしていた時だった。彼が進行役を、私が書記を受け持っていたのだが、うまく進まなくなったので、私が少し口出ししたら、その言葉が返ってきたのである。二人で協力しあって、学級会の司会をするんだと思っていた私は、はっとした。まるで、女のくせに男に口出しするなど言わんばかりの彼の言葉が、ひどくショックだった。どうして、女だからといって、男子に意見を言っではいけないんだろう。どうして、女は終始だまってもくもくと書くことだけをしなければならないのだろう。そんな疑問が、ふつふつと心の中にわいた。

そうして、こういったことは、周囲を見まわしてみると、さまざまな形でみられることであり、一般に男女差別と呼ばれている。従来、男は一家のために働く大黒柱であり、女はその主人に仕える補助的存在とされてきた。その考え方が、どっかと根強くあり、いろいろなところで男女差別の問題がおこっているように思う。例えば、私が経験した「女だから」という言葉や「進行役は男子、書記は女子」という考え方、また、結婚すると女の人がすぐ仕事をやめようとする「男は外、女は内」という役割分業や、会社における「お茶くみや受付は女」という職業分担などである。

私は、この冬休みに、父が昨年から行っているアメリカ合衆国へ母と一緒に旅行した。アメリカは、よく女性が強い国といわれるので、男女差別などないのだろうと思い、私たちが訪れたテシア家で、父や母と一緒にこの問題について話を聞いた。テシア家の家族は、三十代のロバートとスーザン夫妻、五十代のロバートさんのお母さんのシャロットさん、二十代のロバートさんの弟のジョセフさんである。

そこで、私のあの苦い経験を話題に出してみた。すると、

「進行役は女子がして、男子が黒板に書くことはしょっちゅうだよ。」

と、ジョセフさん。しかも、テシア家で見ていると、ロバートさんはスーザンさんや私や

母が出入りするドアを開けたり、コートをかけたり脱がせたりしてくれる。やっぱりアメリカは日本とはちがうんだと思った。

ところが、意外に、男女差別の問題はアメリカにもあった。日本で固定的な「男は外、女は内」という考え方は、アメリカでも一般的だとみんなが話してくれた。このごろ時々話題になる主夫の家庭はあるかと聞くと、それはテレビの喜劇の話でしょうと笑われた。また、銀行へ勤めているスーザンさんによると、銀行では、法律的には平等だけれど、実際上は給料や昇進に、男女の差がはっきりあるということだった。さらに、ロバート夫妻が大きな買物をする時、お金のことは主人のロバートさんだけが話をするということだ。

私は、アメリカでは、確かに女性を大切にするし、学級会の司会など進んでいるところもあるけれど、少なくとも、普通の家庭や一般的な意識では、日本とあまり変わらない男女差別があることに驚いた。そして、ドアやコートの手助けが、本当の意味で、女性を大切にしていることになるのか疑問に思った。それは、女性という人間の、女性を大切にしているだけであって、人間を大切にしているとは思えない。人間として大切にするのなら職場で差別的な扱いをしたり、家計に影響する話を聞かせないということはないだろう。

しかし、テシア家の話で興味深く思ったのは、こうした問題について世代によるへだたがあり、考え方が明らかに変化してきていることだ。「男は外、女は内」という考え方に、シャロットさんは肯定的だが、スーザンさんは変えるべきだというし、若いジョセフさんも変わるのが当然だという意見であった。

このように、日本では特に強いと思っていた男女差別意識が、実は、アメリカでも根強いということは、この意識を変えることがとてもむずかしいことを教えているように思う。しかし同時に、日本でもアメリカでも同じようにそれを変えるべきだという考えが明確に出ていることは、その改善が必然的なものであり、正しいことを示していると思う。

そして、私は、男女差別をなくしていくためには、「男として女として」ではなく、なによりも「人間として」という立場で考えることが大切だと思う。男子女子ではなくクラスメートとして、主人と奥さんではなくパートナーとして、男性社員と女性社員ではなく働く仲間として、お互いを考えたい。私は、将来、自分に合った仕事に取り組みたいし家事もしたい。それは、特別なことではなく、人間としてあたり前のことのように思う。

(労働省婦人局長賞)

男だから、イスを運ぶのか？

長 崎 前 田 智 成 (男)

(長与町立第二中学校3年)

男・女。人間を、その二つに分けて考える事が多いのは確かですが、大して必要もないのに男女を分けてしまって、それがそれぞれの固定したイメージを作っているのではないのでしょうか。僕なりにそんな事を考える機会がありました。

去年の二学期、11月末の僕が通う学校での事です。三年生（僕自身の学年です）の学年PTAという集会の準備で、体育館に生徒250人、その親などのパイプイスを500ほど並べる必要がありました。午後からの集会のために「昼休み男子は会場設営をするから、体育館に集まるように。」との指示が先生から出されたのですが、一方女子は何もしなくていいとの事です。不公平じゃないか、そう思った男はかなりいました。なぜ男だけが、女はラクじゃないか—単純にそう考えた訳です。

考えてみると、この手の会場設営とか、モノを動かすような作業には常に男子が動員されていました。それで女子は教室などの掃除といった“分担”があったのです。しかし今回は休憩時間だからか、女子は何もナシです。

納得できなかったので、担任の先生（男です）に、

「なんで、男子だけが昼休みに集められて、仕事ばせんといかんとですか。男女で平等じゃなかでしょうか。」

と疑問をブツけてみました。先生の答えはおおよそ、こういうものでした。

「確かに、男子だけにさせるけど、そんなにこだわるようなことかな。学年全員じゃ多すぎるし、まあ男子に、てなった訳さ。ホントは男子だけでも全員は多すぎるかもしれないけど。」「男子と女子が平等じゃない、て言うけど、それは生きる事においては平等という意味さ。例えば選挙権なんか、昔は女性にはなかった。」「弱い者を強い者がいたわる事をしなくちゃいかん。女より男は体力のある。スポーツの記録なんかでみるとわかるやろ？」

この答えに反論もできなかったもので、その時は引き上げました。結局イス並べなどの会場設営は男子だけでやってしまったのですが、僕は何だかスッキリしない感じがしていました。それ以来、今までずっと考えているのですが、疑問は晴れてくれませんし、これは

男だけが仕事をするなんて、女はラクだ、ズルイ、という程度の問題ではないような気がしています。もっと、深い意味があるのではないかと。

僕の担任の先生は、そんなに特別な考えを説明されたのではなく、“常識的”な考えを言われたようですが、それにも随分と問題があるのではないのでしょうか。

学年全員では多すぎるから男子で一というのは、この類の仕事は主に男のものとの考えからでしょう。強い者は弱い者をいたわらないといけないのも、その理由でしょうか。ここでは、男→強い者・女→弱い者としてとらえられています、それでいいのでしょうか。先生の説明にもありましたが、スポーツの、男女のトップ同士の比較などでは、確かに男が女より“強い”となってしまうでしょう。平均的には、男が女より体力はあるでしょう。しかし、“弱い”男も、“強い”女も中には当然います。そんな人も平均に押しこめて、ただ単純に男・女と分けてしまうのには賛成できません。第一、わずか？kg程度のイスの事、強かろうが、弱かろうが運べます。

なぜ、そんな事を男だけにやるように、指示が出るのか。というのは、やはり先生たち（もちろん女の先生もいらっしゃるのですが）に、男は活動的で女はそうではない、そうあるべきだ、など言われることもあります、そういう考えがどこかにあり、それが原因だと思うのですが。しかも、僕たち生徒はそれに慣れてしまっているようです。男が主で、女は従だなんてクダラナイ話でしょうが、僕が知る一つの例として、こんな事があります。学校での、生徒の話し合いですが、学級から男女1名ずつ代表がいます。議長が「△年×組。」と指名すると、ほぼ100名男が立って意見などを言うようになってしまっています。女子はノート係で、特別に「△年×組女子。」と指名された時以外の発表はごく少ないようです。議長などがかなり気をつけないと、“女”の意見は出ないようなのですが、これが“男”に得な事であるはずはありません。

こんな事なども、男・女というだけで取り扱いを違えるような、日常生活（もちろん学校も）での「慣れ」から来ているとは言えないのでしょうか。

僕なりに考えた結論をまとめます。

『男・女はもちろん同じものではないが、大した意味も必要性もなく、単純に男・女と分けて考えるのは疑問がある。男は強い・女は弱いなどというのは個人差を忘れてしまっている。男であろうが、女であろうが、まず人間だ、という視点を持ちたい。』

中学生の人間平等論

兵庫 沢柳 敦子(女)

(西宮市立深津中学校2年)

女子は家庭科。男子は技術。今の中学校では、ほとんどの場合がそう決められている。技術と家庭科は、本来一つの「技術家庭科」という教科であるはずだ。現に教科書でもその名称が使われ、二つは同じ中に収められている。それなのに、男子は男子だけで技術の分野を、女子はまた女子のみで家庭科のほうをする。性別で二つに分けられてしまうのだ。これでは、女子がのこぎりをいじったり、男子が編み針をさわったりする機会が失われてしまいはしないだろうか。

「どうしてなのかなあ。」私はそんなところに疑問を感じた。技術家庭科とは、日々の生活から生まれた教科のはずだ。だから、家庭科は女子だけのものではないし、もちろん技術だって男子だけのものではないと思うのだ。女子も技術をやる必要があるのではないだろうか。男子だって家庭科をやるべきではなかろうか。男子だって必要に迫られれば、服のボタンつけや、食事の用意だってしなければならぬだろう。女子も、釘の一本や二本、自分で打てなくては不便を感じることもあるだろう。

このことについて、私の友達数人に意見を求めたことがある。意見は独りよがりではないかと思ったからだ。何より、自分以外の人間はそれをどうとらえているか、ということを知りたかったのだ。

学校での休み時間のことだった。雑談がとぎれたところで、私はこんなふうに聞いてみた。

「…………… ねえねえ、どうして女子は女子だけで家庭科、男子は男子だけで技術やるんだろうねえ。別にどっちしてもいいと思うけど。」

「んん、でもそう決まってるもんは、しょうがないんちゃう。」

鶴の一声であった。話題を握っていたその子の一言で、その話は終わった。関心のかけらもないことだけが分かった。もう、これ以上は言いそうにもない。仕方がないから、一人一人をつかまえ、やっとのことで聞き出した。そのうちいくつかの例をあげてみよう。

「女子だからやるんでしょ。」

「技術よりラクやんか。」

「なんでそんなにこだわるん。決まってるから仕方ないやんか。」

「女子だから」の女子派、「ラクやんか」のラク派、「仕方ない」の仕方派……。女子派は、家庭科は女子のものとする前世紀の遺物。ラク派は、楽なほうへと流れがちで、責任という言葉に嫌う。仕方派は、決まっていることには、ごく従順。

この三派を見ていて、何か「技術と家庭科」以前のものを感ぜないだろうか。「女子の意識の中に、古い考えが根強く残っている。」

「男性中心社会の中で、男性には権力と責任があった。女性にそれはなかったが、支配されることにある意味の気楽さがあった。」女子派は前者と、ラク派と仕方派は後者と、根本的には同じではないだろうか。

女性は「属すること」を、社会の中で長い間強いられてきた。属することは、重ねて言うが、「気楽さ」がある。そんな怠けた考えが女子に遺伝してしまい、先の三派を作り出したのではないか。一種の「甘え」である。よくいるのではないだろうか。いやなこととかは、男子を持ち上げてやらせてしまうような女子とか、男子がやってくれから、自分達はさぼるとかいう女子は……。

新しい時代はもう来ているのだ。これからは女性に変な甘えはばしばしと捨てていかなければいけない。厳しい世の中にも、どんどん突っこんでいかなければならなくなるだろう。例えるならば、死んだカエルだって、女性は自分自身の手で片づけなければならないのである。「女だから」なんて理由になりはしなくなる。

私は、まだ中学生である。しかし、いつかは、時代の流れを担ううちの一人になるだろう。そのころには、きっと技術と家庭科のことも改められているだろう。女性もずっとたくましくなるだろう。そして、男に生まれても女に生まれても、「損したな」なんて感じることにはなくなるだろう。でも、また新しい、男女平等に反する問題が出てくるかもしれない。そうしたら、私は、男に関するものであっても、女に関するものであっても、悪習を改めるために協力したい。どちらに関することであれ、人間としての問題に変わりはないのだから。

～ご意見・ご感想らん～



Ⅲ 高等学校等の部

(労働大臣賞)

一人の人間として

岡 山 丸 山 曉 (男)

(岡山県立岡山芳泉高等学校1年)

男女差別。あってはならないことと知りながらも、まだ何か心のどこかに残している人々。雇用機会均等法を始め、男女同権が叫ばれているにも関わらず、平等というには程遠いこの社会の中で、僕達はこの問題について、どう考えるべきなのだろうか。そしてどのように接していかなければならないのだろうか。

「女のくせに…」

学期末の大掃除の時のことである。皆が汚れた雑布を放り込んだバケツを前に、ある男子が呟いた。周りの洗おうとしない女子への不満である。「ほんとに…」と一度は同意した僕だったが、ふと、雑布を洗う手を止めた。

「女の…くせに?」。彼の言葉を口の中で反芻する。どこかおかしい。他にも遊んでいる男子がいるのに、何故女子にこだわるのか。確かに後片付けを人任せにする態度はよくないが、それ以前に、彼の言葉の裏には、「掃除は女がするものだ」という意識が見られる。

全てはこの一言から始まった。今まで何気なく口にしてきた言葉に女性蔑視の思いはなかったか。これまでの自分の行動は差別ではなかったか。そう考えてみて、これまで自分には縁のないことのように思っていた性差別が、意外に身近にあることに驚いた。特に意識していた訳ではないが、学校行事でも男子中心で、女子に下働きを押し付けていた感がある。人の上で働く役員の多くも男子であり、女子が自ら一歩退いているようにさえ見える。

これらの背景には、家庭や学校での幼少からのしつけが深く関わっていると考えられるが、昔ながらの男尊女卑の考えが今だに僕達の生活の中に残っており、知らず知らずの内に差別を引き起こしているだけでなく、女性に抵抗を半ば諦めさせ、受け身をとらせていることには、怒りを通りとして、言葉もない。

おそらく最大の問題は、女性の能力を開花させる場を狭めている点であろう。体育祭で強く感じたが、看板作りは男子、衣裳は女子と、完全に役割が分けられている。一見当然のことのように見えるこの現実が、既に差別なのである。本人の好みもあれば、得手不得

手もあるだろう。それらを一切無視し、「女は当然…。男は…。」と、性別のみによる仕事の決定に、僕は疑問を持つ必要がある。

男性だけの問題ではない。女性の側にも問題がある。細かい手作業や、水仕事に真面目に取り組む男子を「男らしくない」「女々しい」と言っているのを聞く。また、革新的な女性に対し、「女だてらに…」と考える女性が案外多いのも事実である。こういった古い考え方を女性に押し付けてきた男性にも責任があるが、女性も自分自身を縛り付けないようにし、男性も、女性の秘められた能力を伸ばせる場を広げるべきではないだろうか。

男女平等 — 男女が等しく扱われること。字を見ればただそれだけのこと。でも何か違う。それだけじゃない……そんな思いが頭の中を駆けめぐる。男女が政治・経済・社会的に対等に扱われるというだけではなく、そこには、一人一人の心の中で、その人個人を男女の殻に閉じ込めずに一人の人間として評価していくことが含まれているように思われる。

これまで、男女差別を知りながら、諦め、また、意識の底に沈めていた僕達。そんな僕達若者にとってこれからしなければならないことは、何故差別があるのかという疑問を持ち、男女の違いについてお互いに理解しあうことではないだろうか。体のしくみも違えば、物事の受け止め方も違う男と女が、お互いに刺激となって良い面を伸ばしたり、支えあって社会を築いたりしていることは、本当に素晴らしいことだと思う。平等を強調するだけでなく、体力的に弱い女性を男性がかばい、女性が細やかな気配りを見せる…そういう男女の思いやりは、今後も大切にしていきたい。

今なお根強く残る男女差別。それに対し、僕達のなすべきことは、いったい…。この問いに十分に答えるためには、これからもより多くの知識を得、その答えを実践できるだけの行動をとっていかねばならないだろう。

今、僕は十六歳。まだ青春を歩き始めたばかりである。これからもいろいろな人々と触れあって生きていくだろう。そんな中で、その人を個人としてとらえることで、少しずつでも、自分の中から差別をなくしていこうと思う。そしていつの日にか、男性と女性が、それぞれ男・女という枠に縛られてしまわずに、一人一人同じ人間同士として尊重され、個人の能力を十二分に発揮できる社会をつくりたい。そのためにも、今、この瞬間を大切に生き、差別の色濃い、現在の社会に諦めてしまうのではなく、自分から行動を起こしていこう。そしてその輪を、友達へ、学校へ、社会へと広げていき、皆で取り組んでいこう。「女のくせに」。たった一言から始まった、男女平等への僕の旅。自分なりに考え抜いた今、目の前に新しい社会への道が見えてきたような気がする。そして、新しい自分を生きるための第一歩を、今、僕はここに踏み出す。

(労働省婦人局長賞)

人間らしく、母のように

石川 三浦 明子(女)

(石川県立七尾高等学校2年)

「あなたは女の子でしょう。」

昔から今に至って世間でよく聞かれる言葉の一つです。かつてはそれほど気にもしなかった言葉ですが、最近、私はこの言葉に反発を覚えてしまいます。では、女なら男と違う何をしなければならないのでしょうか。また、男ならどうしろと言うのでしょうか。真剣に考えてみるべき言葉だと思います。

私は母一人、子一人の母子家庭の中で育ち、母は女一人で私をここまで育ててくれました。母にしてみれば急に支えを失った上に、私をかかえ、いろいろと苦しい思いをしたことと思います。小学校の時の父親参観には必ず来てくれましたし、また、冬の大雪のときにはまわりの家では、みな父親がやっていた雪かきを、朝、人より何時間も早く起き2人で無言のままやったことを覚えています。今、しみじみと思うと、これは並たいていの努力では、出来なかったことと思います。

「『男の人にはかなわない』と思ったことは一度もない。」

これが唯一、母の口癖であります。母の職業は薬剤師ですが、病院内では常に必要とされ、職場においてかなり重要な役目をしているようです。それは母の女であることの甘えを捨てた仕事に対する厳しい姿勢がそうさせているのだと思います。私はそんな母のもとで育てられたせいか、男の人の能力が生まれつきすぐれているなどとは思ってはいません、私はそういう生活を続けてきました。

昔は男尊女卑という考えが当たり前でした。それが、今もなおしっかりと根をおろしているように思えます。そこで私達女性は男性より社会的地位が劣っている、または軽く見られているとよく愚痴をこぼしてしまいます。しかし、多くの部分をそうさせている原因の一方を私達女性自身が担っているということも考えなければならないのです。口先だけの男女平等では、何の意味もありません。自分自身の生活の中で実行しなければならないのです。つまり、女性がきちんと自立しようとするときは、まず自分に潜む甘さを捨てなければなりません。それゆえ、すぐに男性に頼るという行為は絶対に避けるべきものだと思

は考えます。そして、日常生活の男女の有り方に対してしっかりと目向けなければならないということです。

そこで男女の結婚に的を絞って考えてみることにします。「結婚したら女性は男性方の家に入り、何の疑問もなく男性方の姓に変え、まっぴらさんとばかりに仕事をやめる。」という慣行が横行しています。多くの女性はこの方式を当然のこととして受けとめているように思えます。相手の家に入ってこまごまと世話をすること、それこそが女性の本当の幸せだと思っている人も少なくないのではないのでしょうか。

男女の不平等が現実の社会や家庭で改善されないのは、こうした私達の日常生活が少しも見直されていないことがあげられます。もっと深く言えば、私達女性が自分の不利になることを真剣に考えていない、または考えてみようとしないうところからくるのだと思います。夫のため、子どものためなら自分が不利なことに目をつむってがんばるのが妻の務め、あるいは、女の幸せだと思い込まされてきたように私は考えます。

「私は女だから。」と、この言葉をあきらめの意味に使うことは避けるべきで、「女だからやってやるんだ。」というくらいの気迫を持つことが大切だと思います。そして家事は女性がするものであるという固定観念を持ってはいけません。反対に経済的責任を男性にという甘えを持つことも許されません。ましてや次の世代の子供に誤った観念を、植えつけるのは、私達自身の責任です。

女らしさ、男らしさ、などという言葉を使うこと自体、おかしいということになるので。すなわち、女らしく、男らしくではなく、人間らしく自立して生きるということなのです。社会の中の一人の人間として。



(労働省婦人局長賞)

私の理想の女性像

静岡 河本 麻子 (女)

(静岡県立静岡高等学校2年)

私の母は専業主婦です。母は、私達家族が何ひとつ不自由しないように炊事や洗濯を完璧に行ってくれます。家事の合間には、編み物や絵のおけいこに行き、家でも楽しそうに自分の趣味に夢中になっている姿があります。

私が、

「専業主婦って暇そうでいいね。お父さんの収入で好きな事が出来て。」

と言うと、母は専業主婦ほど大変なものはないといいます。毎日同じ事の繰り返しで、生きがいまで見失ってしまいそうになると言うのです。そして、最後には必ず、

「あなたは絶対仕事を持ちなさい。」

と締めくくるのです。小さい頃から、このような事を言われてきたので、私は何か職業を持って、結婚しても夫や子供たちのためだけに働いて家事に追われる生活はしたくないと思い続けてきました。今もそのように思っています。女性だから一切の家事を担当しなければならないという考え方は、女性の持つ能力を否定していると思うし、男性と女性を差別するような考え方をなくすためには、女性も男性と同じように、積極的に職場へ進出していくべきだと思いました。

しかし、私の家で昨年の一月、突如として父の転職問題が浮上しました。そこで、家族というものは、父親の仕事に影響を受けずにはいられないのだということを実感しました。そして、「家族とは一体何だろうか」という事を改めて考えさせられたのです。父から転職で東京から静岡にいかねばならないという事を私が聞いた時、母と妹はついていく事が、まるで条件反射のように決まっていました。母は父の妻であるので、ついていくのが当然であると思っていました。これは、母が仕事を持っていなかったから言えたのでしょう。しかし、私の両親が共働きだったら、どうだったでしょうか。母が自分の意見を主張したら、父は単身赴任したでしょうか。これについて考えてみたのです。

私の家は家族というつながりを、どんな時でも、一番重んじます。家族というものは、どんな時でも一緒にいるべきで、それが本来のあり方だと家族全員で思っています。私も

その意見に賛成です。しかし、父の仕事の都合で、もし母に仕事があったなら、それを辞めさせて静岡にこさせることができたでしょうか。答は否だと思います。けれども、そのように考えると矛盾が生じてしまいます。女性の人権も守りたいし、家族も一緒にいたい。女とは一体何なのでしょう。父にためらわずついていく妻も女、仕事を買くのも女——。

私は夫に隷属的に従う女も、家族の事を顧みず、男がまだまだ優位である社会の中で肩ひじをはって男に負けじと働いている女というのも、私の考えている女性像とも違うような気がします。前者は、日本古来の封建的に固定された考え方に基づく女性、後者は、女性が男性化してしまったら、何故男性と女性という性の区別が世の中に存在するのだろうか、そして、家族を顧みないのなら、何故結婚したのだろうかという疑問を私達に投げかける女性——。私が考える女性とは、常に進歩しながら輝いている女性です。夫の為だけに働く事に喜びを感じるのなら、それはそれで素晴らしい事だと思うのですが、それだけなら人間としての成長が止まってしまうと私は思います。社会の中で自分を意識しながら、社会に貢献する事は、自分自身に自信をつける事にもつながると思います。しかし、男性並みに働く事を目標とするならば、女性である必要はないわけです。あくまでも女性としての優しさ、心配り、気遣いを忘れずに、女性である事を意識して社会に参加したいのです。もし、両親が共働きだったとしたら、家族全員で協力する事が大切となります。このように助け合っている家族だとしたら、たとえ離れていても心は一緒です。もし私の夫となる人が転勤しなければならなくなったとしても、私が仕事を持っていたとしたら、私はそこに残らざるを得ないと思います。それが、女だからといって放棄する事は出来ない責任だと思うからです。しかし、たとえ離れてしまっても、男女がお互いに協力し理解し合う事によって、人間としての連帯が築かれていった時、女性が仕事を続けながら家庭を持つという難しさをも克服出来る力がわいてくるのではないのでしょうか。女性であるからという理由で、社会に出て貢献しなくても構わないという考え方を固定させているのは、私達女性自身なのだという事を常に自覚しなければなりません。そして、社会における女性の固定的な考え方は、まず女性自身の中で改革していこうと考えています。



(労働省婦人局長賞)

家事について

三 重 岡 本 剛 (男)

(高田高等学校1年)

前からよく考えていたことだったが、母がパートタイムに出ることになってから僕は特に家の仕事についてこだわるようになった。

僕の家は父母と僕、それに三つ年下の妹がいる。家の生活は大部分が父の収入で成り立っているが、家のローンや僕たち兄妹の教育費、将来のことなどを考えるとやっぱり足りないということもあってか、母は働きにでるようになった。

ところが、きつい仕事のためか母は腰や腕などを痛め、夜も眠れなくなることもさえてきた。そのため父や僕、妹が腕や腰をさすってやったりするのだがやっぱり完全にはよくならない。病院へとも思うのだが、母は、

「こんなことぐらいで…。」

と行かず、仕事に行っている。

パートタイムのきつい仕事のせいもあるだろうが、それだけではない。そのときにでてくる原因に家事というものがあるのだ。母は昔から家の仕事に関しては几帳面で何でもきっちりしていなければ気がすまないようなところがある。そのため、大部分は自分でやってしまうのだ。それで当たり前、家のことは母がするのだと思っていた時期が僕にもあった。でも、よく考えてみるとそれはおかしい。確かに家事にかけては母が一番うまい。だからといって母に任せきりでいいものだろうか。

家事という字は家のことと書く。しかし、母とか主婦などいわゆる女性に関する言葉は全くない。だから男性がやったって別に構わないことなのだ。家事とは本来、家族みんなでやるべきことではないのか。

現在、それに気付いて家事を分担してやっている家族は増えてきた。マスコミでも男性でも作れる料理など、男性の家事に関するものを取り上げられることが多くなった。そんな中である新聞に取り上げられた家事問題でも家事を分担してやることになったという教師夫婦の話が掲載されていた。その夫婦には保育園へ通う子供がおり、ある日、妻が仕事で遅くなったために夫が子供を保育所へ迎えに行き、夕食もきっちりすませていた。それ

に対して妻は「どうもありがとう」と言ってからふと思った。自分はいつも同じことをしているのになぜ礼を言わなくてはならないのか。そのことで夫婦げんかとなったが、結局夫が納得し、それ以来家事に関してはどちらがやっても当たり前という生活が続いているというのだ。

しかし、このような話がある反面、男の人が買い物にでると“奥さんはご病気ですか。”とか“父子家庭ですか。”などと言う人がいるというのも本当だ。こういう話がある限り、家事が分担されるということが当たり前になるのはまだ先の話だろうと思う。まだ家事は“女の仕事”と思っている人が多いのだ。

僕の家でも、“できる仕事はつとめてするようにしよう”と家族みんなで決め、父も僕も妹もできることはするようになった。しかし、食事の準備などは母に頼ることが多く、母への負担はまだ多い。もし、母が病気で倒れてしまったらどうなるのだろうと考えると不安になってくる。それに自分が一人暮らしでもするようになったときのことを考えるとやっぱり家事一切ができるようになっておくことが必要だと思う。

近年は社会への女性の進出が目立って増えてきている。新聞にもよく「女性初の…長」とか「女性初の…隊員」という記事が花開かんばかりに目立っている。でもそんな人たちにも女性であるがゆえの悩みがあるだろう。職場でも何か失敗する度に、

「女のくせにでしゃばるから……。」

などという人がいるだろうし、僕の母のように仕事と家事の負担を背負っている人もいるだろう。

家事は母・主婦と呼ばれる女性だけの問題ではなく、家族を構成している人たち、特に男性が自分自身の問題として取り組まなければ決して解決しない。男性・女性を問う前に人間として家事というものを見つめなければならない。一人の人間として生きる為に必要だからだ。

一人で生活しなければならなくなったとき男性・女性を問う人がいるだろうか。人間はいつ一人になるか分からないのだ。一人で生活することになったとしても僕は快適な暮らしがしたい。そう願う時、やっぱり家事が必要になるだろう。人間として生きる為に家事は必ずできるようになっておきたいと思う。

女だからといって

鳥 取 谷 川 映 子 (女)

(鳥取女子高等学校2年)

「男に生まれたらよかったなあ。」と、今でも時々、私は考えることがあります。男女雇用機会均等法という法律ができ、随分昔より女性の職場への進出が多くなってきました。

そして、「女の時代」などよくテレビでも、日常でも耳にしていますが、実態はやはりきびしい面もあるようです。せっきくの法律ができて女性には能力や意欲に欠けている人が多くてなかなか満足のいく仕事をしてくれる人が少ないのではないかというような表現をテレビでされた方がいました。「なるほどなあ。」と思いながら聞き、一方では女性の中にも政治の世界で活躍されている人もおられれば、駅長をされている人もいます。会社の社長としてがんばっておられる人もいるのです。そして、その方々の中には、結婚もされ、子どもを産んで、家庭と仕事との両立をされている方も大勢いました。私はその方々に、あこがれを感じてしまいます。しかし「男に生まれればよかった。」という気持ちもなくなりはないのです。以前よりは聞かなくなった言葉かもしれませんが、大人が口にする「女の子なのだから」という言葉の後には、いろいろ続きます。「女の子なのだからもっとお行儀よくしなさい。」これはいいと思うのですが、最後には「どうせ女の子は、結婚してしまうのだから…」と出てくるのです。

これには、社会的に偉くならなくてよいとか、あまりでしゃばらない方がよいという考えが強いように思います。

そのために女性の本当の意味での職場の役割りというものが、はっきりしてこないような気がします。また、女性にしかできない出産という大切な仕事もありますが、そのために仕事との両立がうまくいかないという問題も、でてきます。社会的にも女性にしかできないこと、努力次第で男性と対等にできる仕事も、まだ、たくさんあるように思えてなりません。可能性を秘めている女性が、周囲の無理解や社会のつまらない風潮によって流され、自分自身の意欲にストップをかけなくてはならないということは、たいへん残念なことだと思います。人間社会は、男性と女性で成り立っています。だから、私たちが生活しなくてはならない社会の運営も、やはり、男性と女性の手によって行なわれるべきだと思

うのです。しかし、将来結婚した時、私もきっと、仕事と家庭の両立ということで、やはり悩むことになると思います。だから、時々「男に生まれればよかった。男なら、きっと好きな仕事を一生懸命できるのではないかなあ」と頭に浮かんでくるのだと思います。しかし、女として生まれてしまった以上は、「女だから」という言葉の下に、決して悲観的な言葉はいれたくありません。私にしかできない仕事をみつけ、ひとりの人として、その仕事を一生懸命やりとげたいのです。そして結婚を仕事のゴールとしてではなく、通過点にしていきたいと考えます。「女の幸せは男で決まる」とよく耳にしますが、私は、「夫婦の幸せは両方の相手を思いやり、努力する心で決まる」と信じています。

ある本の中で、むのたけじという人を知りました。むのさんは、戦争中、新聞記者をしていて、軍部のいうがままの記事を書いていた。そして、終戦の時、むのさんは同僚と一緒に、戦争責任をとり、新聞社をやめようとしたのですが、結局、新聞社をやめたのはむのさんだけでした。その後は、故郷に帰って詩を書いているのだそうです。私は、この、むのさんの誠実な生き方に共感しました。

そして、詩にもやはり、自分自身を考えさせてくれるものがあります。『北風の中で、春の足音を聞きわける耳を持ちたい。美女の舞踏にガイコツの動きを見定める、そんな目を持ちたい。どんなに苦しいときも、決してハイとイイエをいい間違えない口を持ちたい。』

「脱皮しない蛇は死ぬ。脱皮しない人間は他人を死なせる。」などがあります。

私は、今まで結果ばかり気にして足もとが見えなくなって、迷ってばかりいました。そして、努力してみることも忘れていました。

きっと、何度もハイとイイエをいい間違えていたと思います。「女だから」とあきらめてもいました。しかし、この作文を書きながら改めて私の役割りというものを考える機会を持つことができました。

これからは、社会を背負うひとりの人間として、私にこそできる仕事があるのだと信じて生きていきたいと思います。そして、どんな苦しい時でも、ハイとイイエをいい間違えない口を持って、脱皮できる人間になれるように、これからの高校生活の中で、私の役割りを考えながら努力し、実力をつけていこうと思っているのです。



(労働省婦人局長賞)

女は男を変えられるか

徳 島 加 藤 豊 (男)

(徳島県立貞光工業高等学校3年)

以前、父はよく言っていた。「女は家を守っていたらよい」と。その頃は私もその通りだと思っていた。だが、私が中学校に入る前頃から、母は外で働きたいと言いだした。その時、父は何も言わずに母の仕事を認めていたのだが、母が病気になるったり、気分が悪くなったりすると「外に働きに行ったりするけんじゃわ」と仕事のせいにした。私も父と一緒に「仕事をやめたら。」などと言ったりした。けれど、母は仕事をやめず、家の中のことも、きちんとするようがんばった。

今も母の仕事は続いているのだが、母になぜ仕事に出るのかと尋ねても、「いろいろお金が要るけん。」と、多くを語ろうとしないのである。しかし、節約すれば何とか生活できないわけでもない収入があり、女が外に出ることに理解のない夫を持つという条件の中で、あえて仕事に出るのには、もっと別の理由もあるはずなのだ。

ところで、高校三年生になった私は、自分が就職先を決定するのにさまざまなことを考えた。その中で最も重要な決め手となったのは、その仕事が自分に向いているか、その仕事によって自分を生かすことができるかということであった。もちろんある程度の収入は欲しいが、自分が働くことに喜びを感じられないような仕事には就きたくないと思った。仕事は苦しくても、自分が社会のために役立ち、自分自身も成長できるような仕事をしたいと思った。

それならば、母はどうなのか。私と全く同じ理由で働こうとしているのではないのか。今頃になってやっとそのことに気がついたのだ。社会的な動物といわれる人間にとって、仕事をすることによって他から自分を認められたいという欲求は、男でも女でも変わりはないはずである。いわばそれは基本的人権の一つとも言えるだろう。だがその人権を母は「女であるから。」という理由でふみにじられようとしていたのであった。

「女であるから秀れた仕事ができない。」などという考えが誤りであることは、すでに多くの働く女性たちが証明してきた。社会党の土井委員長やイギリスのサッチャー首相などはその最たる例だろう。だがそういう人たちを、男は女の中の例外として片付けてしまう。

そして、仕事をする気もなく、酒やギャンブルに明け暮れ、妻に暴力をふるうような男を男の例外というのである。しかし、そんな考えが通用しないというのは、誰の目にも明らかである。男と女は、向き、不向きはあるにしても、同じように有能に作られている。一般的に言えることは、女の方は細かい作業、事務などに向き、男は建設業などの力仕事に向いているのではないかと思う。しかし、これも皆、例外はいくらでもあるのであって、男も女も、個人として扱われるのが妥当だと思う。

それでも、なお一般的な言い方をすれば、男独自の視点に立って、男ばかりが仕事をしていたのでは、将来の発展はあまり望めないだろう。男と女がお互いの良い所を出し合い協力し合うことによって、はじめて社会も家庭もよりよい方向に進んで行けるのだと思う。

さて、私は卒業後、トヨタ自動車株式会社に行くことになったのだが、この会社は男が大多数で、女は十分の一程度しか働いていない。仕事の内容からみて女に不向きなことが多いので、そうなのはやむを得ないが、女が働く余地はまだまだあるように思える。今や女性ドライバーの数は急増し、軽自動車のほとんどは、女性向けに作られているという時代である。普通車についても、女性好みの色やスタイル、体型に合う機能や内装の工夫など、女の力なくしては、よい車は創れないだろう。また仕事がますます細分化され、ソフト化も著しい分野では、女の特性を生かした仕事が可能だと思う。

だが、女が外で仕事をするためには、まだまだたくさん問題が残されている。例えば子育てについてである。私の母は、一応親の手が離れたと言える時期になって、再就職したのだが、生きがいのある仕事を求めれば、子育て中も仕事を継続する必要があるだろう。そのためには、必要に応じて休みがとれるような制度をもっと整えなければならないだろう。しかし、そういう制度は、男の側から「さあどうぞ」とは決して言わないだろう。過去の歴史が示す通り女自身が、社会に女の力を必要とする場を創り上げ、女が主張することによってしか、それは、成立しないだろう。つまり厳しい言い方だが、女の力によってしか男の意識は変えられないということである。

今少しずつではあるが、男は変わりつつある。私は自分の身の回りのことを自分でできるようになり、父は料理を作るようになった。

女の力は偉大である。



女性の中の女性差別

広島 林 史子(女)

(ノートルダム清心高等学校3年)

女性問題を考えるとき、私はすぐにある身近な出来事を思い出します。

「女だてらに車なんか乗らんでええ。」従姉妹が運転免許を取るとき、祖母は大反対しました。従姉妹が交通事故にあうのを心配してのことだとは思いますが、それにしても従姉妹の兄が車に乗ることに関しては何も言いませんでした。そのうち従姉妹が軽い事故を起こしたときには「それ見い。女のくせに運転するけんじゃ。」とまあこの通り。大正時代、自転車を乗り回していたという祖母でさえこれです。女性である祖母が同じ女性である従姉妹を、女性であるが故に能力がないと見なしているのです。

またある日、母が用事で家にいなくて祖母と私が夕食を用意することになり、私は当然のこととして弟にも手伝うように言いました。すると祖母が「男が食事を作るゆうことがあるもんかい。これは女の仕事じゃ。」と言って弟の手から包丁を取り上げてしまいました。女性である祖母が家事は女性だけの役割であると決めつけているのです。

このように、女性自らが女性の能力や役割について固定的に考えている部分があるのではないかと思います。それは祖母ぐらいの年を取っている人だけだと思われるかもしれませんが、本当にそうでしょうか。

母はパートで働いており、家事もやっています。父は一切手伝いません。だから母は自然と愚痴が多くなり、男女平等の話には大乗り気です。しかしよく考えてみると、母の唱える男女平等とは、女性の社会進出よりも男性の家庭進出に重きを置いているようです。つまり自分はもうこれ以上社会的に努力するつもりはないが、男性にはもっと家事をしてもらいたい。自分は何もせずについて、ただ男性が女性の望み通りに変化してくれるのを待っているだけ。随分と身勝手な男女平等だと思います。

こういうことは一部の主婦だけに限ったことではないと思います。企業において、男性は忠誠心が厚く仕事熱心であるが、女性は比較的冷めていて熱心さに欠けるといいます。それでいてお茶汲みはイヤだと言う。客観的だといえば聞こえはよいが、企業就職を結婚までの腰掛け的なものと軽く考えている気持ちが態度に現れているのだと思います。

これらのことは女性自身が、どうせ私は女だから適当にやっておけばよい、失敗したって許してもらえるだろう、後は男性がどうにかしてくれる、と甘く考えていることが原因なのではないでしょうか。やはり、私は、女性自らが女性の能力や役割を固定的に考えている部分があると思います。

しかし世の中にはそんな甘い考えは捨てて男性並にバリバリ働いている女性も少なくありません。私も以前はそうなりたいたと願っていました。でもいたずらに男性に追いつき追い越せと息込むのは少し見当違いではないかと思うようになりました。男性に同化し、男性になりきることだけが男女平等ではありません。もしそうなら、それこそ仕事ができるのは男性だけで、女性は何もできないということになってしまいます。女性であることを捨て、男性と同じように働こうとする女性の中にも、無意識にだが、女性の能力や役割について固定的に考える気持ちがあるのではないのでしょうか。

このように、私は男性だけでなく女性の中にも女性を差別する意識が潜んでいるように思います。この状態を改善するには、男性が変わってくれるのを待っているだけではいけません。長い間女性の上に位置して来た男性が、そう易々とその特権を取り払おうとするはずがありません。ならば女性の方から変わっていく必要があります。真の男女平等を得るためには、男性ばかりを非難する前に、女性自身も意識改革をして、自分たちは女性として男性に負けぬ存在であることを自覚しなければならないと思います。

すなわち、女性は車の運転はもちろん他に何だってできる、家事だけが女性の役割ではないと自ら認識し、男性側に家事労働の門戸を解放しながら、社会的な仕事に主体的に参加していくのです。社会に出ても男性になりきるのではなく、あくまでも女性として女性特有の繊細な感覚、優しさ、母性などを武器に堂々と活躍していくのです。少しでも女性の地位を向上させたいという気持ちがあるのなら、必ず実行できると思います。

私は男女がお互いにお互いの人格を認め合い、尊重し合うのが男女平等であると考えます。男女平等社会では、女性も男性も社会に参加し、女性も男性も家事をし、女性も男性も責任を負います。そんな社会実現のためには、女性も自らに磨きをかけるよう努力することが大切だと思います。



添 付 資 料

① 婦人週間40周年記念作文募集要領

② 婦人週間40周年記念作文応募状況

① 婦人週間40周年記念作文募集要領

1 趣 旨

婦人の地位向上については、広く社会一般の理解を深めるため、我が国婦人が初めて参政権を行使した4月10日から一週間を「婦人週間」と定め、昭和24年から毎年テーマを掲げ、啓発活動を展開してきているが、婦人週間40周年を記念し、男女の役割を固定的にとらえがちな社会一般の意識の是正の一環として、21世紀を担う小・中・高校生等からの作文募集を行うこととする。

2 主 催 労 働 省

3 協 賛 財団法人 婦人少年協会

4 作文の内容

第40回婦人週間のテーマ「女性の能力や役割についての固定的な考え方を見直そう」という観点に立った内容であること。

5 応募資格

小学校、中学校、高等学校等の児童・生徒。なお、高等学校等の中には、高等専門学校3年まで及び中学校卒業後入学する職業訓練校や専修学校を含む。

6 応募方法

- (1) 字数は、400字詰原稿用紙（タテ書き）で5枚以内とすること。
- (2) 応募作文に、題、氏名、生年月日、性別、住所、学校名及び学年を明記すること。

7 応募締切

昭和63年1月20日（水）（当日消印有効）

8 応募先

都道府県婦人少年室

9 入選

優秀な作文を入選とし、小学校、中学校、高等学校等の部門毎に、労働大臣賞1名、労働省婦人局長賞5名、（財）婦人少年協会会長賞1名を決定し、賞状及び記念品を贈る。

10 選考方法

労働省に選考委員会を設けて選考する。

11 入選発表

昭和63年3月末日までに、入選者及び所属の学校に通知するとともに、公表する。

12 その他

- (1) 応募作文の著作権は主催者に属する。
- (2) 応募原稿等は返還しない。

② 婦人週間40周年記念作文応募状況

- 応募総数は、10,812編で、うち小学校の部 4,154 編 (38.4%)、中学校の部 3,400 編 (31.5%)、高等学校等の部 3,258 編 (30.1%) である。
- 性別にみると、女子が 8,548 編 (79.1%)、男子が 2,264 編 (20.9%) である。
各部門毎に性別応募状況をみると、小学校の部では、女子73.3%、男子26.7%であり、中学校の部では、女子77.1%、男子22.9%であり、高等学校等の部では、女子88.5%、男子11.5%である。
- また、各部門毎に、学年別分布をみると、小学校の部では、6年生が49.6%と最も多く、5年生28.9%、4年生12.9%と、低学年になるほど少くなっている。中学校の部では、2年生が46.9%と最も多く、1年生(31.9%)、3年生(21.1%)の順となっている。高等学校等の部では、学年間に余り差はないが、1年生(35.2%)、2年生(34.6%)、3年生(29.9%)の順となっている。

婦人週間40周年記念作文応募状況・全国集計表

		計	女	男	百 分 比		
					計	女	男
応募総数		編 10,812	編 8,548	編 2,264	% 100.0	% 79.1	% 20.9
小 学 校 の 部	計	4,154	3,044	1,110	38.4 (100.0)	(73.3)	(26.7)
	1 年 生	46	34	12	(1.1)		
	2 年 生	97	70	27	(2.3)		
	3 年 生	196	137	59	(4.7)		
	4 年 生	537	369	168	(12.9)		
	5 年 生	1,201	871	330	(28.9)		
	6 年 生	2,062	1,550	512	(49.6)		
	不 明	15	13	2	(0.4)		
中 学 校 の 部	計	3,400	2,622	778	31.5 (100.0)	(77.1)	(22.9)
	1 年 生	1,085	786	299	(31.9)		
	2 年 生	1,596	1,222	374	(46.9)		
	3 年 生	717	613	104	(21.1)		
	不 明	2	1	1	(0.1)		
高 等 学 校 等 の 部	計	3,258	2,882	376	30.1 (100.0)	(88.5)	(11.5)
	1 年 生	1,147	979	168	(35.2)		
	2 年 生	1,128	999	129	(34.6)		
	3 年 生	973	894	79	(29.9)		
	訓 練 生	4	4	0	(0.1)		
	不 明 等	6	6	0	(0.2)		